

20041

MDCT が有用であった部分肺静脈還流異常症の1例

背景近年マルチディテクターCT(multi detector-row computed tomography: MDCT)が普及し、技術の向上により時間分解能が改善され心臓の画像化が可能になった。今回、4本ある肺静脈の内1~3本が右心房に戻る比較的まれな疾患で様々な合併心奇形を伴う、部分肺静脈還流異常症(partial anomalous pulmonary venous return: PAPVR)を経験し、構造診断をつける上でMDCTでの有用性を証明できたので報告する。症例就職時健診にて近医を受診し、心雑音が認められなかったが精密検査必要との事で当院を受診となる。心胸壁心エコーにて診断することとなり、右心房、右心室の拡張有り右心房に流入する短絡路有り心房中隔の欠損が見られた。心室中隔欠損、PAPVRも否定できなかった。経食道心エコーにて短絡路検索目的で検査し、卵円孔の周辺の心房中隔には欠損孔は認められなかった。構造診断をつける上でMDCTにて造影検査を行った。方法PAPVRの撮影範囲は肺静脈の還流部位に基づいて、無名静脈から門脈を含む範囲をretrospective ECG gating法で撮影を行った。撮影開始時間の決定はバルサルバル洞近傍にてボーラストラッキング法で行った。処理はワークステーションにて多断面変換表示法(multiplanar reformation: MPR)、ボリュームレンダリング法(volume-rendering: VR)で行った。結果肝静脈との短絡路を認め下大静脈に流入している事が視認できた。結語エコーではわかりにくかったPAPVRの一例を経験し、MDCTが構造診断に有用であった。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分~ 時 分

受付番号

演題番号